

第十二回 武蔵野文学賞「高校生部門」

土岐善麿短歌賞 選評

● 選考委員

武蔵野大学講師

林 あまり

武蔵野大学 日本文学研究所研究員

河路 由佳

歌人

横山 未来子

武蔵野大学講師

寺井 龍哉

● 選評

一首単独の部（敬称略）

【最優秀賞】

水色のかすれかかったマーカーペン教科書の上の戦争なぞる

山下 啓太

たくさんの中から「水色」を選んだのが素晴らしい。「戦争」をなぞる気持ちの複雑さは、まさにタイムリーな一首。（林）

教科書の大事なところにマーカーペンで線を引くのは日常的な行為ですが、「戦争」に注目したことで、広がりのある作品となりました。火や流血の赤や黒などが連想される「戦争」に寒色、それも「水色」という語を使ったことで、水で鎮めるようなイメージが重なり、「かすれかかった」という表現は、連日の戦争報道に擦り切れそうになっている現在の私たちの

気分の特徴のようにも読めて、共感されました。個人的なテーマの作品の多い中、大きなテーマを扱っている点に惹かれました。（河路）

「水色のかすれかかったマーカーペン」が、マーカーペンで引いた線を映像としてあざやかに呼び起こす。さらに、戦争を「なぞる」という表現から、人間は愚かなことを繰り返し、それをペンが掠れるほど何度もなぞらなければならない、というイメージが重なる。勉強中の一場面から、大きな社会的テーマへと展開する批評性のある一首。（横山）

ひとつひとつの戦争には、開戦に至る事情、戦略、そして大量の犠牲者がいたはずだが、教科書の上では、一言で片づけられてしまうこともある。「戦争なぞる」の結句に、その具体的な状況まで想像しようとする深い意志を感じた。（寺井）

【優秀賞】

図書館の階段スカートふわり咲き薄闇の水飲み場へ向かう

磯田 有季

「スカートふわり」に、女性であることが美しく宣言されている。フェミニズム的な視点からも魅力を感じる。「薄闇」との対比が素晴らしい。（林）

階段の上には精神を鍛える図書館、下には体を潤す水飲み場。その途中でスカートがふわりと花が咲くように開いた一瞬が静止画のような印象を残しつつ、作中人物は階下の薄闇の水飲み場に消えていきます。薄闇の水飲み場に向かう光や湿度の変化まで感じさせて巧みな作品です。（河路）

「スカートふわり咲き」という表現から、階段の踊り場で勢いよく曲がる姿が目には浮かぶ。まるで映画の一場面のようだ。下の句には仄暗い湿ったイメージがあり、これによって美しいだけではない陰影のある一首になっている。「薄闇の水／飲み場へ向かう」の傾れるような句跨がりも、階段を駆け降りる動作によく合っている。(横山)

勉強の合間の休憩時間だろうか。夏の図書館に特有の静かさ、薄暗さが目に浮かんできた。「スカートふわり」からは、自分の姿を少し離れたところから見ているような、やや冷ややかな自意識も感じられる。(寺井)

【佳作】

いつだって好きなこととして生きていたい

明日は見れない今日の空見る

武富 愛音

下の句に発見があります。同じように見えても違う。今日の空は今日見ておかないと二度と見られなくなる。いま、一番好きなことをするという事のかけがえのなさが伝わりました。「見れる」は「ら抜きことば」と言われて書き言葉では避けられますが、「見られる↓見れる」は「買われる↓買える」と同じく「れる・られる」の形から可能に特化して生まれたもので、話し言葉として使うことに問題はありませぬ。(河路)

上句は、誰もがそう思っているはずなのに、大きな声で言うことが遠慮されるような内容だ。はっとさせられたところに、少し感傷的な「明日は見れない今日の空」という表現がや

って来る。そうだ、明日の自分は、もはや今日の自分ではないはず。どんどん過ぎ去ってゆく「今日」の時間のはかなさ、それゆえのかけがえのなさ、貴重さを言い当てているところに胸を打たれた。(寺井)

拍動にあわせ震えるうさぎの毛最初の一言待つ暗闇で

永岡 詩歩子

全体に小さな命に対する慈しみ、命への恐れを繊細な表現で描きとろうとしたところに惹かれました。下の句の表現がわかりにくいのが残念に思われました。(河路)

うさぎの「毛」の震えまで捉えたことで、体の小刻みな震えがリアルに感じられ、うさぎの命の存在感が迫ってくる。「最初の一言」が何の音なのか具体的には分からないが、たとえば降り出す雨の音などを想像できるだろう。何かを全身で待っている緊張感のあるひと時が表現された一首。(横山)

その人に食べられている牛丼にありがとうの変顔をする

平野 慎悟

「その人」が食べている「牛丼」に、「その人」を幸せな気分にくれてありがとう、と礼を言いたくなる。「その人」が幸せだと自分も幸せなのでしょう。「牛丼」へのお礼の伝え方は「変顔をする」こと。ここに含羞とユーモアが感じられて、爽やかです。(河路)

何重にも屈折した歌だ。その人にお礼を言うわけでも、牛丼を作った人にお礼を言うわけでもなく、「牛丼」に向けて、「変顔」でお礼の気持ちを伝える。「その人」という言い方にも、「その人が食べている」ではなく「その人に食べられている」とするところにも、奇妙

なねじれがある。入り組んだ表現の奥に、特定の誰かに対する、微妙な、しかし真摯な気持ち
ちが潜んでいるようで注目した。(寺井)

ただいまと帰った家はもう暗い机の上のランプが光る

前田 明星

夕方学校から帰ると、机の上にランプのかかった食事が用意されている、という情景を想像しました。用意してくれたのは例えば、夕方出かけた家族かと思われます。家には誰もいなくて寂しいけれど、温かいものが感じられます。結句の「ランプが光る」が印象的です。

(河路)

家に入ると机の上に夕食が用意されており、それを覆うランプが仄暗さの中で光っているという状況を、過不足なく表現している。誰もいない暗い家に帰った時のさびしさを、場面描写のみで表すことで余韻の深い一首になっている。(横山)

また来るねわたしが発したその声は祖母の耳には届いてない

安田 芽愛来

かつてのように豊かな表情を見せなくなったおばあさんを見舞った別れ際の切ない気持ち
ちが伝わります。ただ、反応がなくても聞こえているかもしれない。「届いていない」と断言するのではない別のおさめかたもあり得ます。そのあたりに工夫の余地があると思われ
れました。(河路)

離れて暮らす祖母なのだろう。ふたたびここを訪れて、再会したいという願いをこめて、「また来るね」と言う。祖母がその声を聞きとってくれることはないとしても、でも、念のため、言っておく。わかりやすい意味や効果はないとわかりきっていても、それをせずには

いられないというようなことが、実は日常にはたくさんあるような気がしてくる。(寺井)

連作の部

【最優秀賞】

流転 齋藤 千穂

どの歌も、その奥に秘められた主人公の深い思いを感じさせる。「コスモスが炎みたいに」「あなたから目を逸らした」「過去の弟をすべて飲み込む」など、どれも主人公には、見ているしかないような深い孤独がある。

なんといつても「流転 秋風に吹かれてコスモスが揺れる姿をずっと見ていた」、孤独ここに極まれり。ドラム式洗濯機ががらんがらんと廻るような流転。スケールの大きさに舌を巻いた。(林)

〈小学校跡地に咲いたコスモスが炎みたいにあかるく揺れる〉に始まり、時間の経過を感じさせる作品十首で構成されています。〈公園の遊具が塗り替えられていて思い出にふとノイズが混じる〉〈テノールは響いた過去の弟をすべて飲み込むぐらいに深く〉〈秋時雨 おかけになった番号は現在使われておりません〉などが印象的です。一首ごとに違った素材を扱いながら、否応なく過ぎて行く時間の流れの中に、刻々と失われていくものを惜しむ気分が貫かれ、「流転」という題はその気分を指すものと思われます。それぞれ端正な作品で一首だけでも伝わりますが、音色の異なる十首全体でハーモニーが響くように構成されている点、連作の部の最優秀賞にふさわしく思われました。(河路)

一首一首の完成度が高い一連。過ぎてしまってもう戻らないものがある、というテーマが一貫して流れているのが特徴的である。

「公園の遊具が塗り替えられていて思い出にふとノイズが混じる」は、かつて遊んだ公園が急に遠い過去のものになってしまった感覚を「ノイズが混じる」と表現したのだろう。古いビデオテープを見ているような表現に独自性がある。「秋時雨 おかけになった番号は現在使われておりません」は、電話の音声案内の言葉をそのまま取り入れ、秋の寂しさや人恋しさを巧みに表現している。（横山）

時間とともに過ぎ去って戻らないものがあり、しかし絶えることなく日々は続いてゆき、いつまでたっても、私は私のままだ。そんなことが主題になっている。冒頭と末尾の歌に「コスモス」を詠みこむ構成意識、一字あけの巧みな活用、着実な風景や心情の描写で、安心して読みすすめられる一連だった。〈秋時雨 おかけになった番号は現在使われておりません〉のように、日常的に耳にする言い回しをそのまま定型に取り込む手法も、主題と深くむすびついている。さらに自分の内面の渾沌を見つめられるかが次の課題だろう。（寺井）

【優秀賞】

自販機の影

磯田 有季

タイトルになった「微炭酸売り切れの文字 自販機の横出来た影君を待ってた」がやはり良い。もちろん言いたいのは、君を待ってた心理の切なさだ。一方で売り切れの文字という、どうでもいいようなことが強く視覚に迫る、そのバランスが素晴らしい。「ひまわりが下を

向いてて無理矢理に上を向かせるまた項垂れる」は、十代の主人公の状況も重なって読み取れる。(林)

日常生活の中から生まれた作品、十三首で構成されています。(ひまわりが下を向いてて無理矢理に上を向かせるまた項垂れる)(数列が続くように流れる雲よ 十七歳の誕生日だね)(改札を通る緊張思い出す 休み明けの足秋めくピアス)などが印象に残りました。ことばの選び方にセンスの良さが感じられますが、推敲の余地のある作品もありました。例えば、(微炭酸売り切れの文字 自販機の横できた影君を待ってた)は魅力的な取り合わせですが、名詞句が三つ並び、第三句以下、助詞の省略が続くところ、工夫次第でもっとよい作品になりそうです。(河路)

「鏡」「横笛」「自販機」「数列」などの素材が効果的に用いられている。

「数列が続くように流れる雲よ／十七歳の誕生日だね」は、「数列が続くように」の比喻が個性的で、青春期にしかうたえない一回性のかがやきがある。一方で「微炭酸売り切れの文字／自販機の横出来た影君を待ってた」など、助詞を省いたことでやや生硬な印象を与える作がある点が惜しかった。(横山)

日常的に目に触れる物たちを歌のなかに散りばめて、生活を想像させる展開に引き込まれる。(数列が続くように流れる雲よ／十七歳の誕生日だね)は、数字が並ぶように、単調に続いてゆく日々のなかで、抽象的な区切りに過ぎない「誕生日」がやってくることへのかすかな憂いがある。(本屋にいるのは落ちつかないが／ときめきも含め好き寄りの嫌い)も、白黒のはっきりしない感情を、たしかにつかんでいる。描写と心情のセットで一首を作っている手つきが見えやすく感じられるところに、やや難があった。(寺井)

【佳作】

Blue Ray 西頭 陽生

色彩を表す語彙を多用して、外側の世界への違和感や憧れをうたいあげる、その一貫した試みに注目した。〈海から来て海へと還るサビエンス 海水浴は帰巢本能〉や〈踏切の音で眠りにつきたくて ちゃんと夜を切つてよね、遮断機。〉は、認識や描写が粗雑にも感じられるが、それゆえの力強さ、固有の迫力も感じられる。歌数がやや少ないが、展開を明確にして歌数を増やしてゆけば、さらに魅力が伝わりやすくなったのではないか。(寺井)

社会の保健室 秀嶋 瑞季

タイトルになった「君の眠る保健室 パーテーションに 濾過されるひかりが唇に落っこちる」が素晴らしい。少しくラシックすぎるくらい端正な「濾過されるひかり」という表現に、「落っこちる」の合わせかたが絶妙だ。「盛れてない自撮りだって捨てちまう前に僕宛に送ってくれよ!」の勢いも楽しくていい。(林)

恋、音楽(ロック?)、漫画、ラジオ。予備校、教室、保健室、ときどき廊下。短歌の定型を自由に踏みはずしながら、身体も心も、一瞬も立ち止まってはられない疾走感が見事だ。〈六本の弦が琴線になるピックを落とす／おれ・ダンシング・イン・ザ・虚飾〉、〈教室のフロントマンだった／たいしてギターも弾けないくせに／たまらなく好きだった〉など、新たなリズムを目指して暴れまわる言葉たちが、次はどこへ向かうのか。大いに期待する。

(寺井)

死んでから飲む水

平野 慎悟

刺激的な語彙、驚きのある歌が、立て続けに目に入ってくる。浮かびあがるのは、生と死をくり返す人間の肉体の脆さ、可笑しさという主題だろうか。〈裸になるタイミングがあるヒト、一つ飛ばしてタイミングがないヒト〉は、漫才の言い回しで露骨さを避け、〈好きな人の裸は別に見たくないです。好きじゃない人のもそうです。〉は、遠慮がちな語調に、社会に対する鋭い異議申し立ても含んでいるようだ。短歌史の様相もいちおう横目に見つつ、どんどん新たな地平を目指してほしい。(寺井)

余命二時間

古地 陽一

「織姫と彦星ですら年一で会うのにぼくはおれに会えない」。実は深刻な内容なのに「年一」という若者らしい省略の話しことばが入るミスマッチ感が、新鮮でステキだ。タイトルの「余命二時間」は、何かと思わせて「二時間後には切れてほしいエアコンの余命をちょっと確かめる おやすみ」という、静かな歌だった。この作者は語彙が豊かで、リズム感もよく、どの歌も読み応えがあった。(林)

「泣き声に埋まる帰り道のバスで止まぬ耳鳴りがHであること」「夕立は夏の断末魔のように 朝日は街を恐れるように」など、豊富な語彙によって自身の感覚を新鮮に表現している。「アダムインザステーション ねえ、缶コーラを買う後悔、いまの空は何色？」などリズムカルで実験的な作にも勢いがある。文学的な志の高さを感じる一連。(横山)

佳作の四作品、いずれも表現することへの意欲が感じられる個性的な力作だった。「Blue

Ray」は〈この橋は宵と深夜の結節点 皮膚呼吸から鰓呼吸へと〉〈流れていく石の数だけ昨日がある 沖積平野を走る終電〉といった日常生活を突き抜けた言葉が並び、勢いのある十首で構成されています。「社会の保健室」は〈名前を入れ替えて歌うラブソング すべては文化祭の帰り道の話だ〉〈思い出は膿んだきずぐち社会には僕らを治せる保健室はない〉など思い通りにならないもどかしさや社会への諦めのにじむ作品十七首です。「死んでから飲む水」は十九首と作品数が多く、〈死んでから飲む水の味思い出す やり残したこと全部尿になる〉など、実験的な作品で構成されています。〈泣きたい夜 さぞかしい機微 起きす朝〉といったフレーズは日本語の文法をわざと崩して破壊力があります。「余命二時間」は臨終の緊迫感漂う題名ですが、実際は〈二時間後には切れてほしいエアコンの余命をちよつと確かめる おやすみ〉という一首からとられていて、予想を裏切ります。〈「人類は火を使つて生きてきました」線香花火が落ちる音を聴く〉〈夕立は夏の断末魔のように 朝日は街を恐れるように〉など才気を感じさせる作品群でした。(河路)